

第13期人文学・社会科学特別委員会の進め方について

令和7年7月30日

文部科学省研究振興局

第13期人文学・社会科学特別委員会における調査審議事項

第12期の審議を踏まえ検討いただきたい主な論点

- ① 人文学・社会科学における**研究基盤**の在り方や、その活用方策・必要な支援について
- ② 人文学・社会科学における**共同利用・共同研究体制**の成果、現状の課題、今後期待される機能や役割について
- ③ 人文学・社会科学の**研究成果の可視化とモニタリング**について
- ④ その他人文学・社会科学の研究振興に関する事項について

【参考】第95回科学技術・学術審議会（R7.4.16）資料4より抜粋

人文学・社会科学特別委員会

第12期における主な審議内容

- 人文学・社会科学の振興に向け、人文学・社会科学が主体の「共創型」プロジェクト研究の推進や、研究DXに向けた基盤開発・整備、我が国の人文学・社会科学の研究動向に係るモニタリング指標の開発等について、調査・審議を行い、令和5年8月に「人文学・社会科学の振興に向けた当面の施策の方向性について」を取りまとめた。
- 人文学・社会科学の振興に向け、人文学・社会科学の現代的役割、新たな「知」の創出に向けた分野研究の深化及び異分野との連携・融合、新たな「知」の創出を支える研究基盤、研究成果の可視化・モニタリング、研究成果の国内外への発信の強化について、調査・審議を行い、令和6年8月に「今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（中間まとめ）」を、令和7年1月に「今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（審議のまとめ）」をとりまとめた。

引き続き検討すべき論点又は今後の方向性等

- 第12期の審議を踏まえ、特に以下3点について、引き続き検討を行う。
 - 人文学・社会科学における研究基盤の在り方や、その活用方策・必要な支援について
 - 人文学・社会科学における共同利用・共同研究体制の成果、現状の課題、今後期待される機能や役割について
 - 人文学・社会科学の研究成果の可視化とモニタリングについて

- 第12期人文学・社会科学特別委員会においては、人文学・社会科学分野の世界の潮流や研究現場での課題等について、委員・有識者より活発なご議論をいただいたところ。
- 生成AI等のテクノロジーの進展や社会情勢等の変化も見られる中、**第13期の審議を開始するに当たって、改めて、人文学・社会科学分野の特性や近年の変化を踏まえた“今後の人文学・社会科学研究のあるべき姿”を議論いただき、それらを念頭に、今後、各観点ごとの現状の課題等の検討を行う流れとしてはどうか。**

検討の進め方のイメージ

本日

今後の人文学・社会科学研究のあるべき姿とは何か

- 人文学・社会科学の特性
- テクノロジーの進展や社会情勢等の変化を受けた人文学・社会科学における近年の変化

】 P.4-7参照

※人文学・社会科学内においても分野ごとに状況が異なることに留意

次回以降



研究基盤



人材育成



研究資金

今後の人文学・社会科学研究のあるべき姿を実現するに当たり、各観点の目指すべき状態・現状の課題は何か



社会との関わり



異分野との連携・融合



国際性



研究成果の可視化

※観点はあくまで例示であるため、上記に限らず多様な観点から議論が必要であることに留意

現状の課題を解決するための方策は何か

(人文学・社会科学における共同利用・共同研究体制、人文学・社会科学振興関係事業等)

人文学・社会科学研究の特性（例）

◆ 研究対象の視点

【今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（審議のまとめ）（令和7年1月17日人文学・社会科学特別委員会）】

人文学・社会科学は、個人の思想や行動あるいは人々の協力や対立の原因と帰結の分析を通して知の増進を実現し、人間の精神活動の根本的かつ根源的な理解に資するとともに、社会的な合意形成や社会的対立の解決方法を探求する学問分野である。

【令和6年度 文部科学白書】

人文学・社会科学は、人間・文化・社会を研究対象とし、人間の精神生活の基盤を築くとともに、社会的諸問題の解決に寄与するという重要な機能を有するものです。

◆ 研究基盤・研究資源の視点

【今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（審議のまとめ）（令和7年1月17日人文学・社会科学特別委員会）】

自然科学では大規模・中規模の研究設備が重要な研究基盤になるが、人文学・社会科学においては、文字・モノ・図像・音声等の多様な資料・データやそれらを研究した成果論文などが蓄積されることで、研究基盤が形成されるという特徴がある。

研究資源の種類	具体例
文字	古典籍、歴史書、新聞、行政文書
モノ	民具、考古物
図像	絵画、書籍等の挿絵
音声・映像・写真	ことば・動き・風景
データ	社会調査の統計データ、アンケート調査のデータ、分析機器からアウトプットされたデータ、社会実験



伊勢物語 国文学研究資料館蔵・鉄心斎文庫
(国書データベースより引用)



追儼面 鬼 東京国立博物館蔵
(東京国立博物館・収藏品データベースより引用)



尾張国富田荘知行古図 東京大学史料編纂所蔵資料
(史料編纂所蔵荘園絵図摸本データベースより引用)

時間軸（年次）	2020年		
	人口 (A)	男	女
全国	126,146,099	61,349,581	64,796,518
北海道	5,224,614	2,465,088	2,759,526
札幌市	1,973,395	918,682	1,054,713
札幌市中央区	248,680	112,853	135,827
札幌市北区	289,323	136,596	152,727
札幌市東区	265,379	126,023	139,356
札幌市白石区	211,835	100,062	111,773
札幌市豊平区	225,298	104,154	121,144
札幌市南区	135,777	62,347	73,430

国勢調査令和2年国勢調査人口等基本集計
(e-Statより引用)

人文学・社会科学研究の特性（例）

◆ 研究成果発表の視点

【人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について（とりまとめ）（令和5年2月7日人文学・社会科学特別委員会）】

人文学・社会科学の研究成果発表の留意すべき多様性として、

○論文や書籍など成果発表媒体が多様であること

○人文学・社会科学の一部の分野は、言語や地域に密接に関連した研究を行っており、当該言語で発表されることが多いため、発表言語が多様となること

○社会的な機能によるインパクトが多方面に多様な形で生じていること

の3点が挙げられる。

成果発表媒体における多様性

自然科学では研究成果は論文で発表することが一般的であるが、我が国の人文学・社会科学の成果発表の形態は、国際ジャーナル論文だけにとどまらず、国内ジャーナル論文等（学会誌、大学紀要を含む）や書籍（共著、一部執筆を含む）、学会発表、会議論文、展示など多様である。またこれらのアウトプットに関連して、表彰、製品、知的財産権などの短中期的な効果であるアウトカムももたらされる。

2008年及び2016年に国立大学法人評価の研究業績水準判定に提出された研究成果について見ると、経営学は論文の比率が高いが、歴史学は著書/編著の比率が高い。このように人文学・社会科学の中でも、分野によって成果発表の媒体が異なる。

また英国UKRIが運営するGtRのデータによれば、人文学・社会科学においても論文が最も多く報告されているが、その集中度については分野間の差が大きい。法学、文学・言語学等は論文は4割強にとどまっており、学会予稿や書籍チャプターの割合が高い。

発表言語における多様性

言語学、歴史学、民俗学など研究対象となる地域のコンテキストに依拠する研究の場合、当該地域の言語で発表されることが多い。一方で、経済学など国際的な成果発信が一般的に行われている分野もあり、発表言語は多様となっている。

社会的インパクトにおける多様性

人文学・社会科学の社会的な機能によるインパクトは、社会全体への啓発から個別の地域住民の理解増進など、多方面で、多様な形で生じている。一方で、その多様性から、現時点では計量的な手法でモニタリングを実施することは困難である。

◆ 研究の時間軸の視点

【学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—（平成29年6月1日日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会）】

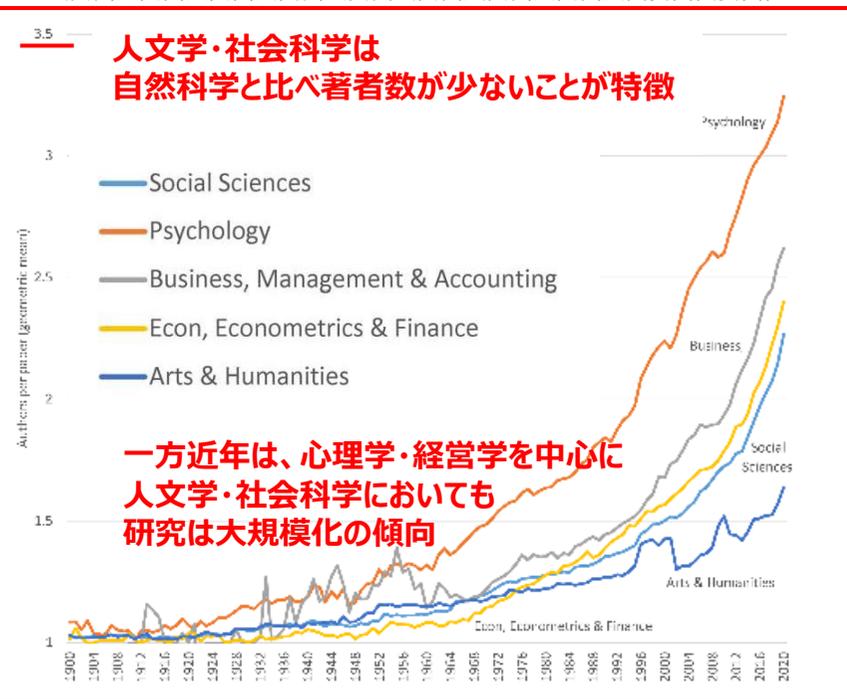
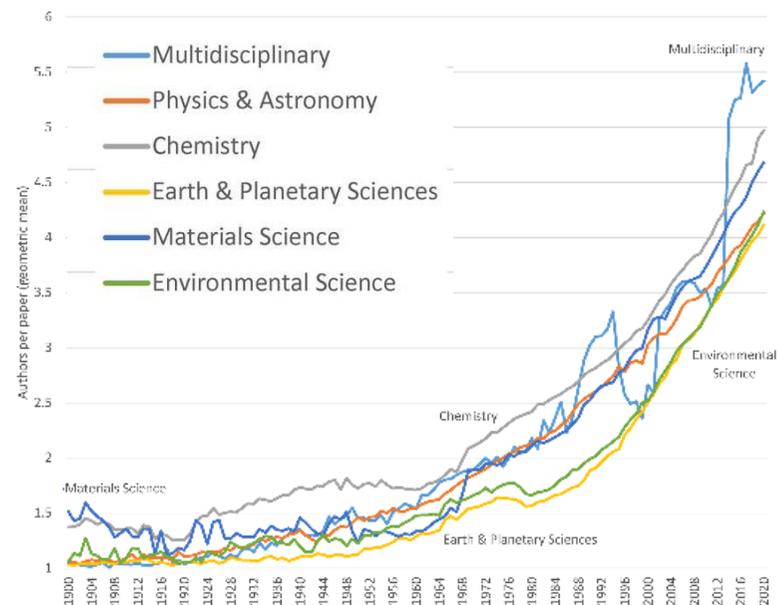
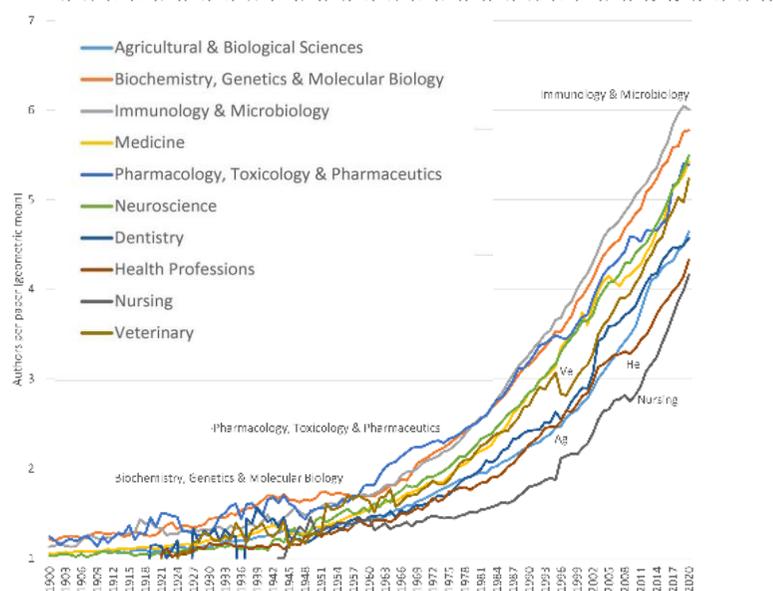
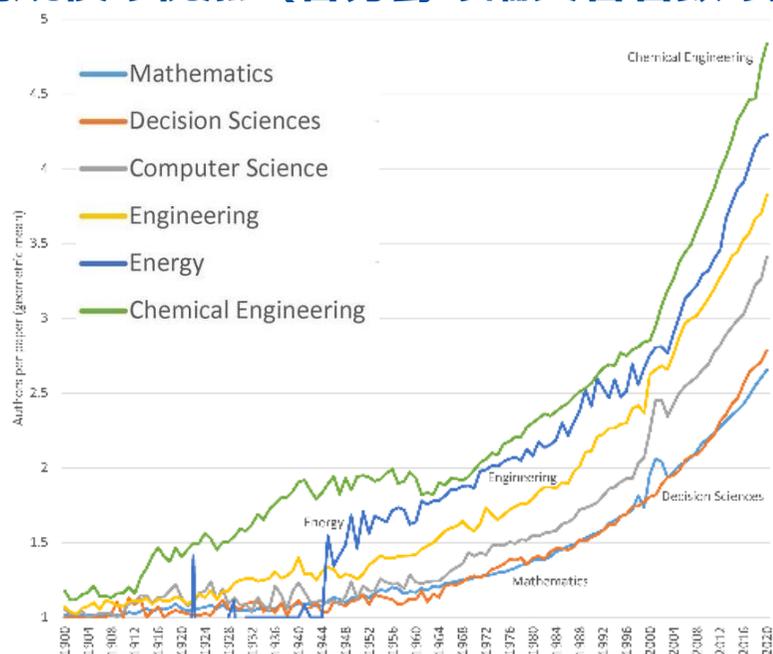
人文・社会科学では、独創的な研究成果をあげるために必要とされる時間が相対的に長い（「スロー・サイエンス」性）。

【今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（審議のまとめ）（令和7年1月17日人文学・社会科学特別委員会）】

また、人文学・社会科学が関係する研究においては、提唱された哲学・考え方が時を得て社会に大きなインパクトを与えることや、成果が長期的に研究に影響を与えることもあることから、長期的な観点で評価していくことも重要である。

人文学・社会科学研究における近年の変化（例）

◆ 研究規模の視点（各分野の論文著者数の変化）



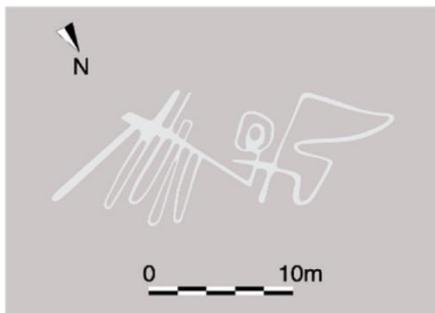
From: **Research coauthorship 1900–2020: Continuous, universal, and ongoing expansion** Quantitative Science Studies. 2022;3(2):331-344. doi:10.1162/qss_a_00188

(出典) 第122回科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 (R7.5.8) 小泉周 北陸先端科学技術大学院大学副学長発表資料を基に文部科学省が加工・作成

人文学・社会科学研究における近年の変化（例）

◆ 研究の高度化・高効率化の視点

AI活用によるナスカ調査の加速



- ナスカ台地は約400平方キロメートルに及ぶ広大な地域であるため、高解像度の航空写真を全て目視で確認し、全域の現地調査を実施することは時間的に困難であり、**現地調査を効率的に実施するためには、地上絵が分布している可能性が高い場所を特定する必要。**



- 山形大学ナスカ研究所とIBM研究所の共同研究において、**AI（人工知能）を活用し、飛行機から撮影した膨大な量の空中写真を分析したところ、合計1309件の有望な候補が特定され、その約4分の1について現地調査を行った結果、わずか6か月間で303個の新しい具象的な地上絵を発見することができ、具象的な地上絵の数はほぼ倍増した。**
 ※IBMのAIを使用することにより、**地上絵の発見率は16倍も向上。**

※ 山形大学プレスリリース「[AIによってナスカ調査が加速したことで、既知の具象的な地上絵の数がほぼ倍増し、地上絵の目的が明らかになった](#)」（プレスリリースの「研究に関する問い合わせ先」は山形大学・坂井正人教授ほか、R6.9.24掲載）・[山形大学ナスカ研究所HP](#)を参考に文科省作成
 ※ 図出典：山形大学プレスリリース「[深層学習（ディープラーニング）技術を利用したナスカ研究の成果が国際学術雑誌「Journal of Archaeological Science」に掲載されました](#)」（R5.6.1掲載）

◆ 研究対象・研究手法の視点

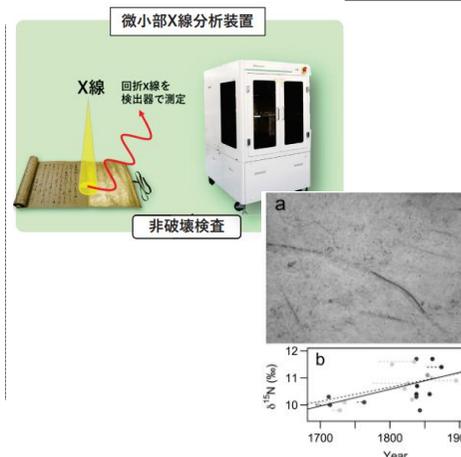
マテリアルとしての書物からの情報抽出及び分析・解析

高精細デジタル顕微鏡による紙表面の様子や紙に混入している物質の観察



- 文献でのみ伝わっていた事実について、書物や絵画を自然科学的観察により実証することが可能に

分析装置による古典籍の解析



<解析のイメージ>

- 紙や顔料の構成元素から、書物の製作や流通、消費に係る経緯を把握する
- DNA解析で1000年間のヒトを知る
- 和紙に含まれた毛髪から、当時の食生活を知る

本日は議論いただきたい点

- 人文学・社会科学の特性とは何か
- テクノロジーの進展や社会情勢等の変化を受けた人文学・社会科学における近年の変化は何か
- これらを踏まえた、今後の人文学・社会科学研究のあるべき姿とは何か

※人文学・社会科学内においても分野ごとに状況が異なることに留意



今後の人文学・社会科学研究のあるべき姿

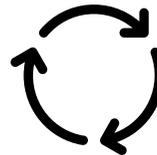
人文学・社会科学の特性

- ✓ 自然科学との差異
- ✓ 研究対象・手法等の変化を受けてもなお必要となる視点・能力

(例)

- 技術革新は人文学・社会科学の研究にも影響
- 自然科学の手法を人文学・社会科学に応用する際には人文学・社会科学の特性にも留意することが必要

双方の視点を踏まえた議論が必要



人文学・社会科学における近年の変化

- ✓ 人文学・社会科学内の研究の進展
- ✓ 社会の変化、技術革新
- ✓ 自然科学に限られない「研究」全体のトレンドの変化

【参考】学術分科会での議論①

第95回学術分科会（令和7年4月16日）における委員からのご意見（人文学・社会科学関係）

- 先端技術における優位性を獲得してイノベーションにつなげるためには、人文学・社会科学の力が必要。産業界の立場からすると、そもそもイノベーションにおいては、“技術の壁”や“事業化の壁”、そして“制度・規制の壁”など様々な難しさがあるが、その先に新しい技術・事業を市民社会の方々に腹落ちして受け入れてもらえるかという“社会受容の壁”があり、これを破るのがやはり一番難しい。人文学・社会科学には、新しい技術・事業の価値や、「何が本当の価値なのか」といった根源的な“問い”に対する答えをより深く学問的に示していただくことを期待している。
- 大きな話で言えば、人文学・社会科学を動員しなければ解けない問題という、トランス・サイエンス的な話がある。例えば原子力発電の安全性については、科学に問うことはできるものの、科学だけでは回答が出ない問題だと感じる。第13期ではそうした科学技術だけでは何ともならない課題についてより深く検討していただけると非常にありがたい。
- 様々な技術がどんどん発展していく中で、それをどうやって社会の中で持ち込むべきか、我々が倫理的に何を選んでいて、どういう国民の幸せをつくっていくのかという点を、科学者同士でももっと議論をする必要があるほか、多様なステークホルダーを巻き込んだ議論も必要。
- 生成AIをはじめとする科学の力を正の方向で社会に還元するためには、どうしても人文科学・社会科学の方々と一緒にやっていくことが必要。そういった中で、人文学・社会科学の研究者が、自然科学の研究者と寄り添い、並走して議論していく環境がこれから強まると良い。

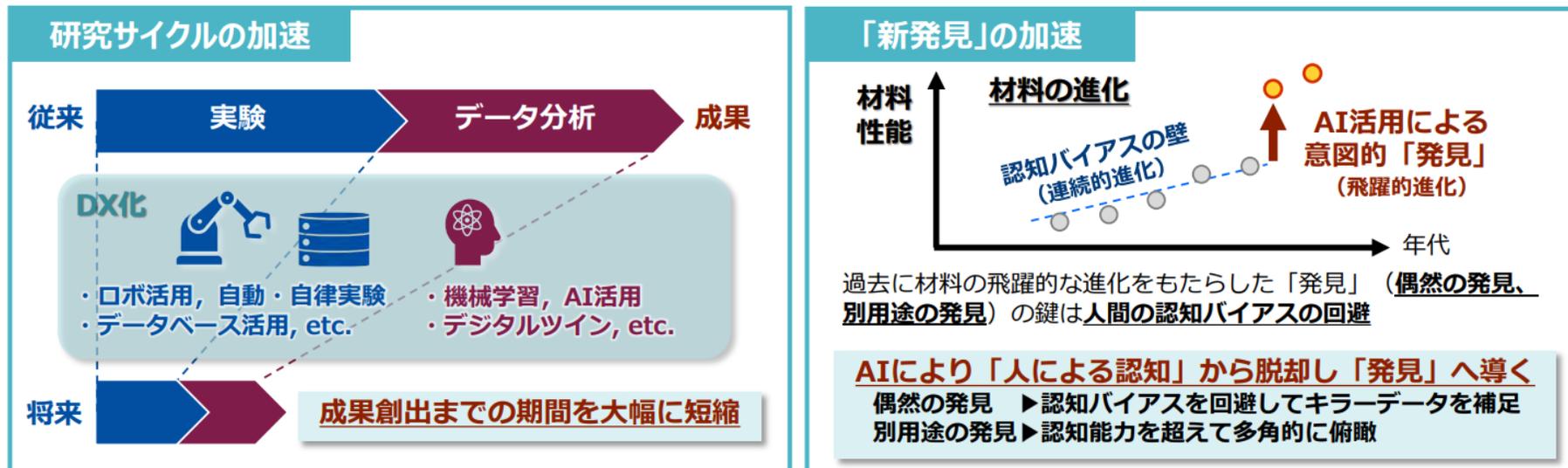
【参考】学術分科会での議論②

様々な分野の科学研究におけるAIの活用例

多様な分野におけるAIの活用	活用例
科学研究で創出されるデータの改良や情報の抽出	医学領域における超音波画像診断支援／宇宙観測データのノイズ除去／古文書に記述されている内容の自動解析
シミュレーションの高度化・高速化	タンパク質の立体構造予測／気象予測／材料分野における望ましい特性を持つ材料や反応の発見／仏像の顔の類似度や制作年代・地域の推定
実験や研究室の自律化	自律的な物質探索ロボットシステム／抗体遺伝子クローニング（同じ遺伝子型となる細胞集団を作製すること）の自動化システム
新しい研究テーマ等の提案	研究データや論文情報の解析による科学的仮説の生成

（公表情報をもとに文部科学省が作成）

データ駆動型研究開発による材料開発の例



（出典）令和6年8月30日 科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会ナノテクノロジー・材料科学技術委員会、ナノテクノロジー・材料科学技術の推進方策について 参考資料より抜粋

【参考】学術分科会での議論③

第96回学術分科会（令和7年7月2日）における委員からの意見（人文学・社会科学関係）

- 実はAIの活用に関しては、基本的には自然科学系と人文系の研究とでそんなに大きくは変わらない。例えば人手でやっていたもののうちAIでできることは積極的にAIを活用することによりその分人間の研究時間を増やしたり、目的に合わせたデータベースを作りその分析を短い時間でAIにやってもらって人間は出てきた結果をきちんと考えたりするなど、自然科学系の研究と共通する部分も多い。
- 人文系はどう違うかという、一つは人文系のデータは非常に多様だということ。文字データだけではなく、画像データ・動画データもあり、そうした多様なデータが本当に連携していければ非常に大きな可能性を生むはず。ただ、そのためには多様なデータ同士をどのように連携させていくかという方法論を考えていく必要がある。
それから、人文系には歴史的な過去のデータが膨大にあるが、我が国は諸外国に比べてこうした歴史的なデータのデジタル化、データベース化が非常に遅れている。AIを使った研究なり、あるいは分野横断的な研究なり、どちらにしても、歴史的なデータのデジタル化、データベース化などによりしっかりしたデータ基盤をつくる必要がある。
- 現在のAI技術は理工系だけに役立つものではなく、人文社会系の研究にもすごく役立つものとなっている。AIエージェント、あるいはディープリサーチという技術があって、100から数百ページにわたるWebページをリアルタイムで見に行き、それを大体10分から20分ぐらいでまとめてくれるという、人間では到底できないようなことをしてくれる。そういう能力は、理工系だけではなくて人文社会系の研究等にもとても役に立つものであるため、ぜひ人文社会系の方のほうにも目配りし、研究者の活躍を応援するようにしていただきたい。